成長譚としての
『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』

吉　増　知　希

1　はじめに

クレティアン・ド・トロワは掛け値なしに中世ヨーロッパで最大の詩人である。彼が描いたアーサー王伝説に由来する騎士たちは、当時の騎士道精神の点において完成された騎士たちであった。一方で、『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』（以下『聖杯の物語』）の主人公であるペルスヴァルは、まるで子供のように無知でそれゆえ失敗を繰り返す。ポフィレは、『聖杯の物語』は無知なペルスヴァルが他者からの助言によって成長をする「教育の物語」であると主張している。しかし、『聖杯の物語』において、ペルスヴァルの失敗の多くはその教育、つまり他者からの助言に起因している。ポフィレはペルスヴァルの母の役割も過小評価している。本論では、ポフィレの主張に若干の反論を加え、「教育」に対して「主体性」をキーワードとして、さらにペルスヴァルの母の役割を再評価し、ペルスヴァルの騎士としての成長を論じる。また、『聖杯の物語』と関係の深い「ペレドゥル」についても触れる。

2　中世の騎士道理念

騎士として成長するということは、どのような要件を満たせばいいのか。この章では当時の騎士に求められた資質と理念を、世俗的なものと宗教的なものに分けて簡単に説明する。

2.1　世俗的理念

騎士の資質として重要視されていたのは、「武勇」(prouesse)、「忠節」(fidélité)、「気前の良さ」(largesse) である[1)]。軍事階級である騎士にとって、「武勇」は必要条件であり、それがない騎士は無用の長物とされた。教会によって戦争が忌避されたため、騎士たちは馬上槍試合で自らの「武勇」を見せつけた。封建社会ができあがるにつれて、「忠節」が重要視されるようになる。領主と封臣間は双務契約で結ばれており、それを強化するのは「忠節」であった。「気前の良さ」は、吟遊詩人たちが収入を得るために喧伝したために生まれた。彼らは武勲詩を謳い、パトロンたちを囃し立て、より多くの収入を得ようとしたのである。

上記の資質と合わせて、中世の騎士たちの精神的指標となったのが宮廷風恋愛 (amour courtois) である。宮廷風恋愛は南仏やイタリア北部で活動していたトルバドゥールたちによって生み出された。そしてその考えが北仏ではトルヴェールとして、ドイツではミンネジンガーとして拡散していった。中心となる理念は、身分の高い既婚女性との不義の愛と女性崇拝、そして女性の夫 —— 多くの場合において領主や王などの権力者 —— による愛の妨害である。夫によって追い詰められたとしても、恋人たちは愛を貫くのである。

宮廷風恋愛が社会に影響をもったのは、当時の社会に理由がある。長子相続制が広がるにつれて、次男以下の騎士たちは領地をもつことができなくなり、誰か領土をもつ人物に仕えることを余儀なくされた。彼らが憧れたのは領地をもつことであり、そのためには領地をもつ裕福な女性の心を射止めることが最も可能性のある方法だった。そして女性たちも望まぬ結婚にうんざりしていた。宮廷風恋愛は不遇の騎士にとっては成功譚であり、女性たちには自分たちにはない幸福な恋愛を描いたものだった。騎士は女性を褒めそやし、女性は騎士に愛を与える。社会の状況を反映しながらも、宮廷風恋愛はおとぎ話のように当時の人々を楽し

---

1) ペインター、pp. 26–28.

ませた。

2.2　宗教的理念

中世において、教会の権威は世俗領主たちを上回るほど強大だった。当然、騎士たちの理念にも教会のイデオロギーが侵入した。弱者を保護すること、秩序を保つことであること、そしてその武勇で教会を保護することである[2)]。

弱者の保護と秩序の維持は、騎士がゲルマンから受け継いだ暴力的な性格を抑えるために唱えられた。キリスト教は非暴力を是としており、それをなんとか軍事階級に浸透させたかったのであろう。また騎士の増長は教会の権威を脅かすことになる。平和を維持するために、「神の休戦と平和」が用いられた。これにより、騎士たちの私戦は大きく制限された。これは一定の成果をあげた。私戦を禁止された騎士たちは、馬上槍試合で戦いへの欲求を発散し、自らの武勇を誇示した。封建制が広まるにつれて、武器を持たない教会は権力が分散された王ではなくより下層の騎士たちの力を求めた。教会の後ろ盾が欲しい騎士たちと教会の意図は合致することになった。さらに教会は、騎士たちに死後の救済を報酬として設けた。

3　「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」

3.1　「ペレドゥル」は原本か

ウェールズの物語群である『マビノギオン』に含まれる「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」（以下「ペレドゥル」）は、その大筋を『聖杯の物語』と同じにする。クレティアンは序文で、当時のパトロンであったフランドル伯フィリップ・ダルザスから「原本（le livre）」を与えられたと語っている。この「原本」の正体はわかっていない。しかし、「ペレドゥル」が『聖杯の物語』の原型となった、もしくは原典を同じとする

2）フロリ、p. 105.

ことは、二つの物語の類似を見れば疑いない。「ペレドゥル」では主人公のペレドゥルがペルスヴァル、アルスル王がアーサー王、クーがカイ、グワルッフマイがゴーヴァンに対応する。

『マビノギオン』の写本は『白い本』と『赤い本』の二種類が現存しており、その両方に「ペレドゥル」は収録されている。『白い本』は十四世紀半ば、『赤い本』は十四世紀末から十五世紀にかけて成立したと推察されるが、『マビノギオン』自体はそれよりも前の十一世紀後半から形作られていったとされる。もし『マビノギオン』が十一世紀後半に成立していたのなら、クレティアンは「原本」としてこれを読み、『聖杯の物語』の下地とした可能性が高い。ただし注意すべき点がある。それは現存する「ペレドゥル」の完全な写本は、十四世紀にまでしか遡れないということである。つまりクレティアン以後に書かれた「ペルドゥル」は、『聖杯の物語』の影響を受けて、内容が変わっている可能性がある。つまり「原ペルドゥル」とでも呼ぶべき作品を読んだクレティアンが『聖杯の物語』を書き、さらにそれを読んだ人物が、いわば逆輸入の形で『聖杯の物語』の影響を受けた「ペレドゥル」を書き残したかもしれない。そのため、現存の「ペレドゥル」は、本来のものと比べると『ペルスヴァル』より後のものである可能性がある。少なくとも宮廷風恋愛の考えの影響下にあることはたしかだ。ともあれクレティアンが「ペレドゥル」を参考にしたことは多くの研究者の意見の一致するところである。次は両者の差異をあげていく。

3.2 「ペレドゥル」と『聖杯の物語』の差異

「ペレドゥル」は『聖杯の物語』と比べると、かなりケルトの要素を含んでいる。巨人の親子、毛の色が変わる羊などである。これらをクレティアンが省いたのは、あまりにも異教の雰囲気が強すぎるのと、話の本筋には必要のないものだからだろう。ここで問題とするのは、完全に省かれたエピソードではなく、同じ状況に置かれたペルスヴァルとペレドゥルがとる行動、それに対する周囲の反応の違いである。それらの差異

を見れば、クレティアンが描きたかったペルスヴァルという人物が浮かび上がってくるのではないだろうか。ここでは、エピソードの変更された箇所をあげるにとどめ、その変更とペルスヴァルの人物に関する考察はあとの章でおこなう。

物語の最初の変更点は、天幕の乙女に関するものである。『聖杯の物語』ではペルスヴァルは母の忠告を誤解して、天幕の乙女から無理やり指輪を奪う。一方で「ペレドゥル」では、ペレドゥルの要求に応えて、天幕の乙女は指輪を彼に差し出す。なお本論における『聖杯の物語』の引用は天沢（1991）に、「ペレドゥル」本文の引用は中野（2000）による。最初の引用は『聖杯の物語』で、二番目は「ペレドゥル」である。

> 「もうひとつ、若者は言った、母さんに言われたことがある。あなたの指から、指輪をもらうことだ。ただしそれ以上は何もしちゃいけないってね。ほら、この指輪だ！　ほしいなあ！」
> 「指輪はぜったいあげないわよ、と乙女は言った、いいこと、力づくで指から取ったりしちゃいけませんよ」
> 　若者は乙女の手首をつかむと、むりやりに指を伸ばさせ、指輪を相手の指からぬき取ると、自分の指に嵌めて…（p. 156）

> 「ぼくの母が」と、彼が言った。「どこであろうと、美しい宝石を見たらそれを取りなさい、といいました」
> 「それではお取りください、友よ」と、彼女は言った。「あなたには、さしあげることを惜しみはいたしませぬ」
> ペレドゥルは乙女の指輪を取り、ひざまづいて（原文ママ）乙女に接吻すると、馬をひいて出発した（p. 279）

このあと、天幕の乙女の恋人がやってきて、不貞を疑い彼女を責めるという筋は変わらない。この差異からわかることは、クレティアンはペルスヴァルの単純さと女性に対する失敗を描こうとしたということであ

る。このクレティアンの意図については四章で考察する。

4　ペルスヴァルの主体性と成否の関連

『ペルスヴァル』を一人の若者の教育の物語であるとする意見が存在する。例えばポフィレは、「概して『聖杯の物語』は騎士の形成の物語、したがって《教育》の物語として解釈するのが適切である」と述べている[3)]。フラピエも『聖杯の物語』にそういった面があることは認めている[4)]。しかしペルスヴァルは、彼が受けた教育、母とゴルヌマンから受けた助言通りに行動したにもかかわらず失敗を犯す。『聖杯の物語』が教育の物語であるなら、なぜ彼は教育によって失敗せねばならないのだろうか。むしろ、教育はペルスヴァルに騎士としての振る舞い方を示しただけで、重要なのは彼の行動に彼自身の主体性が存在するかどうかだ。『聖杯の物語』は教育の物語ではなく、主体性の物語としたほうが適切だろう。この章では、ペルスヴァルの主体性と彼の行動の成否の関係を考察する。

4.1　母とゴルヌマンの助言と失敗

まずは母とゴルヌマンの助言、そしてペルスヴァルが犯した失敗を整理する。

母の助言は、ペルスヴァルが旅立つときに彼に送られる。母がペルスヴァルに説いたのは、女性を助けること、女性に対する振る舞い方、供に旅する人にはその名前を尋ねること、そして教会でのお祈りを欠かさないことである。特に母は、女性に対する振る舞いと、教会での祈りについて強調している。教会での祈りについては後述するので、ここでは女性に対する振る舞いについて見る。旅立つペルスヴァルに対して母は以下のように語る。

3）ポフィレ、p. 247.

4）フラピエ、p. 222.

貴婦人や乙女には奉仕すること、そうすればきっと敬われます。でも、もしも誰か女の人に近づくときは、相手の気に入らないことをして、困らせたりしないよう、気を付けてね。若い乙女に接吻すると、もっといろいろさせてもらえます。でもね、もし接吻を許されても、それ以上は何もしてはいけませんよ。ただ、もしその女の人が指に指輪をはめていたら、帯に財布を吊していて、もしも愛のしるしに、あるいはおまえの求めに応じて、それをおまえにくれると言ったら、その指輪をもらっておいて構わないのよ（p. 153）

母の忠告は宮廷風騎士道を説いたものである。忠告を受け取ったペルスヴァルは、この言葉通りに行動する。そこに主体性はなく、彼は母親に与えられた常識を、その意味を考えることなく適用するのである。以下のペルスヴァルのセリフは、天幕の乙女と出会ったときのもので、彼の主体性の欠如を表している。

娘さん、今日は、母さんがこう挨拶しなさいって言ったんです。ぼくの母さんは、ぼくに教えて、若い女の人には、どこで会っても必ず挨拶しなさいって言ったんです（p. 155）

その前に、どうしても、あなたに接吻しなくちゃ、と若者は言った、それで誰が頭にこようとね。母さんがそう教えてくれたんだ（同上）

もうひとつ、と若者は言った、母さんに言われたことがある。あなたの指から、指輪をもらうことだ。ただしそれ以上は何もしちゃいけないってね。ほら、この指輪だ！　ほしいなあ！（p.156）

彼は何度も母に言われたのだと繰り返して述べる。こうしてペルスヴァルは、知らず知らずのうちに乙女の名誉を傷つけ、彼女の恋人に疑念を起こさせる。母の教育は、ペルスヴァルの主体性の欠如によって完全

に効果を失っているどころか裏目にでている。女性が拒絶しているにも関わらず、ただ覚えている忠告に従うことは、ペルスヴァルに主体性がないことの証である。

次の忠告者としてゴルヌマン・ド・ゴルオーが登場する。ゴルヌマンはペルスヴァルに戦い方を教えて、上質な着物と剣を与えて、新たな忠告をする。

> さて、わが兄弟よ、よく心に留めてほしい、もし、そなたが誰か、騎士と戦わねばならぬ、という事態になったときは、次のことをそなたにお願いしておきたい。もしそなたのほうが打ち勝って、相手はもうそなたに対して、身を護ることも、抗う（さからう）こともできず、ただ慈悲と乞わねばならぬようになったならば、そなたは相手を憐れみ、決して殺したりせぬように心がけよ。また、自分からあまり物を言わぬようにしなさい。ぺらぺらと、あれこれ口に出したりすると、阿呆ではないかと思われますぞ。なぜならば、賢人の言にもあるではないか、《口数多き者は、罪を犯す》とな。されば、友よ、そなたに忠告するが、喋りすぎぬことじゃ。そしてまた、お願いしておきたいが、もし、男であれ女であれ、逆境にある人、もしくは何かのことで、困っておる夫人に出会ったならば、その人たちの力になってあげなさい、きっとそれはよい行いとなろう、もし力になってあげることができ、またもしそなたにその力があれば。もう一つ、そなたに教えておくが、このことは、おろそかにしてはなりませんぞ、おろそかにすべきことではありませぬ――自ら進んで教会へ行き、すべてを造り給うたお方に祈りなさい、そなたの魂をお憐れみ下さるように、そして、この現世（うつしよ）に、敬虔な信徒としてそなたをお守りくださるように（p. 174）

宮廷風の考えが中心にあった母の助言と比べると、ゴルヌマンのものは宗教的な騎士道の理念に基づいている。無益な殺生をしないこと、弱

者の保護、教会へ赴き祈りを捧げることである。しかし最も重要なものは「沈黙を守れ」というもので、それが二つの失敗をペルスヴァルに引き起こすことになる。一つはブランシュフルールに対する失敗である。これは天幕の乙女とはまるっきり正反対の性質をもつ失敗で、受けたばかりのゴルヌマンの忠告に、唯々諾々と従うペルスヴァルの主体性の欠如がみてとれる。ブランシュフルールの城でペルスヴァルは忠告に従って一言も発さなかったために、女性であるブランシュフルールが彼に話題を振っている。

> 寝台に懸っている、上等な絹の被いの上に、二人（ペルスヴァルとブランシュフルール）は並んで腰を下した。騎士が四人、五人、六人、そこへ入ってきて、くっつきあって腰をおろし、一言も言わず、女主人の傍に坐った客が黙りこくっているのを見守った。若者が口をつぐんでいたのは、あの立派な騎士が自分に与えた、忠言を思い出していたからである。…乙女のほうは相手が、どんなことでもいいから、話しかけてくれるのを待っていたが、やがて、もし自分のほうからさきに話しかけなければ、相手は一言もものを言わないであろうということが、はっきり見てとれた。そこで乙女は、ていねいに言った（pp. 177–178、括弧内筆者）

天幕の乙女のときと同様に、ペルスヴァルは自分に与えられた忠告を生真面目に思い出している。しかし今回の振る舞いも、騎士としては大変まずいものだった。騎士道理念に照らし合わせれば、女性が喜ぶような会話を男性がするべきである。例えば、騎士の華として描かれているゴーヴァンはエスカヴァロンの城の姫と膝を突き合わせたとき、彼女と愛について語り合う。

> ゴーヴァン卿はそこに残ったが、乙女と二人切りになるのが、気に入らないわけなどなかった。…二人は交々愛を語り合う。だって、他の

> ことなど話題にしたら、大変むだに時を費やすことになるのではないか。ゴーヴァン卿は乙女を切々と、かき口説いて自分こそは、終生そなたの騎士になろうと言う。乙女のほうも、拒むことなく、大いに喜んでそれを受け入れる（p. 251）

ペルスヴァルと比べると、ゴーヴァンは実にうまく振る舞って、姫の愛を勝ち得ている。ゴーヴァンが女性に対して成功していることを見ると、ペルスヴァルの沈黙は明らかに失敗なのである。天幕の乙女のときとは振る舞いが正反対だが、結局のところ他人の言葉の通りにしか行動しないことによりペルスヴァルは失敗している。そしてゴルヌマンの忠告は、聖杯の城においてもペルスヴァルを縛り付け、彼は最大の失敗を起こすことになる。

聖杯の城で歓待を受けるペルスヴァルは、血の滴る槍を見て、それがいったい何なのだろうかと疑問を持つが、ゴルヌマンの忠告を思い出して口をつぐむ。

> その夜そこへ来たばかりの若者は、このふしぎを見て、どうしてこんなことが起こるのか、尋ねることを差し控えた。というのも、思い出したのだ、あの騎士がかれに与えた忠告、あまり喋りすぎないように気をつけなさいと、教え諭されたあの忠言を（p. 202）

ここでも、ペルスヴァルがゴルヌマンの忠告を執拗に思い出していることを、クレティアンは描いている。槍に続いて聖杯が現れるが、聖杯の中には誰の食事が入っているのかと疑念を抱くが沈黙を貫く。そしてその沈黙が失敗であることをクレティアンは暗示している。

> 若者は、それらが通りすぎるのを目にしながら、あえて訊ねようとしなかった、グラアルについて、誰にそれで食事を供するのかを。というのも、心の中にやはり、あの賢い騎士の言葉があったからだ。それ

で、何か不都合が起こるのではあるまいか、なぜなら、私は耳にしたのだが、お喋りがすぎるということがあると同様に、場合によってはあまり黙っていすぎるということもあるものなのだ。そのために幸運が訪れるか、災難が落ちてくるか私にはわからない、とにかく何も訊ねないのだ（p. 203）

そして、この間もグラアルが、二人の前を再び通りすぎたが、若者は、グラアルで誰に食事を供するのか訊ねなかった。喋りすぎないようにと、優しく教えてくれたあの、賢者のことが忘れられず、いつも心にかかって、思い出されたからだ。けれども、必要以上に黙しすぎた（p. 204）

場面が進むにつれて、ペルスヴァルの沈黙は負の面をもつことがわかる。ペルスヴァルは三度もゴルヌマンを思い出して、師の言葉通りの態度をとる。そこに彼の主体性はなく、他人の言葉に縛られているのである。

ペルスヴァルにとっては、他者からの忠告はある種の呪いの様相を呈している。最初は母から受けた呪いゆえに女性に関する失敗を犯し、次にゴルヌマンの忠告は母のものを塗り替えるが、結局それによっても、ペルスヴァルは女性に対して失態を演じ、漁夫王を救うことができなかった。与えられた教育にただ従うだけでは失敗をするだけであり、それをふまえて主体性をもって行動しなければならないのである。作中のペルスヴァルの成功は、主体性によって保証されている。

4.2　ペルスヴァルの成功と主体性

ペルスヴァルの行動で成功と得たものは、必ず彼自身の意志によって行われている。最初の成功は騎士の鎧を手に入れることだ。初めて見る騎士の装備に魅了されたペルスヴァルは、母に対して騎士になるためにアーサー王のもとへ向かうと言う。

…とにかく、騎士をこしらえる王様のところへ行きたくて行きたくてたまらないんですよ。それで誰がどう思おうと、ぼくは行くんだよ！（p. 152）

ペルスヴァルの冒険は明確な意思から始まる。そしてこのままアーサー王のもとへと向かったペルスヴァルは王に鎧を要求するが、馬から下りないペルスヴァルの無礼に怒ったクーが彼を挑発する。ペルスヴァルの来訪直前にアーサー王を罵った真紅の騎士から鎧を奪えと言うのである。

おい、いいことを言うじゃないか。すぐ行ってあいつから武具甲冑を、奪い取れよ、おまえのものさ。そのためにわざわざ来るなんて、馬鹿なことをしたものだな（p. 162）

この言葉を受けたペルスヴァルは、すぐにアーサー王の城を出て、短槍を投げて真紅の騎士を殺して彼の鎧を奪い取るのである。クーの言葉は挑発だが、やり方を示すという意味では教育ともいえる。しかしペルスヴァルが鎧を手に入れられたのは、鎧を望む彼の意志があったからだ。ペルスヴァルは騎士への第一歩を踏み出すことに成功する。

次の成功はブランシュフルールの愛を得ることである。出会いでは彼女に対して拙い振る舞いをしたペルスヴァルだが、彼女の敵を打ち倒すことで彼女の恋人となることができる。一見、ブランシュフルールを助けたのは、ゴルヌマンの忠告に言われた「逆境にある人を助けるべし」に基づいた行動に思える。しかしペルスヴァルの行動には、忠告を越えたところに彼の意志がある。ペルスヴァルの枕元に現れたブランシュフルールは、涙ながらに自身と城が置かれた窮状を語る。ペルスヴァルはその言葉に心を動かされて、彼女を救うことを決断するのである。

まもなく、決断しさえすれば騎士は勇名をとどろかせることができる

> だろう。というのも、乙女が自分の涙で、騎士の頬を濡らしに来たのは、そして縷縷話を聞かせたのは、ただに、騎士の心を駆り立てて、戦いに立ち上がらせ、乙女のために勇を鼓して、乙女の土地を守るように、仕向けるためにほかならなかったのだから（p. 181）

ブンシュフルールの心理的な誘導はあるものの、地の文で語っているように、ペルスヴァルは自身の決断を持って行動する。だからこそ、翌朝ブランシュフルールに、ペルスヴァルは自身の決意を再び語るわけである。

> 姫、今日は他の宿所を求めて発つことはいたしません。その前に、あなたの領地すべてを、平和にしてさしあげたい、もし私にできるならば、もし、他所であなたの敵に出会って、何につけそいつが依然健在で、あなたを苦しめつづけていたりしたら、つらい話です。でも、もし私がそいつを打ち破り、殺すことができたら、あなたの愛を求めたい。ごほうびに、あなたの愛を私のものにしたいのです。それ以外には何もほしくはありません（p. 182）

注目したいのは、ペルスヴァルが敵を殺したらと仮定していることである。この前に、ゴルヌマンから敵に情けをかけて命を奪わぬようにと言われたにも関わらず、ペルスヴァルはその忠告を忘れて敵を殺そうという。ペルスヴァルの意志が、他者からの忠告を上回っている。ここにペルスヴァルが主体性をもって行動しようとしていることがわかる。さらに対価としてブランシュフルールに彼女の愛を要求している。母の忠告には、財布または指輪を、許しがでたならもらっても良いというだけである。ゴルヌマンの忠告にもこのような内容は含まれてはいない。つまり、ペルスヴァルはこの愛の駆け引きを自ら編み出したのだ。主体性のある行動は、ペルスヴァルを騎士として成長させることができる。

ブランシュフルールはペルスヴァルをそそのかしたことに罪の意識を

抱いたために、戦いに赴く彼を止めようとするが、ペルスヴァルの決意は固く、敵陣に飛び出していき、さんざんに敵を打ち破る。結局、ペルスヴァルは、ブランシュフルールを救うことができる。

> さて、このクラマドゥーの手から、領地と乙女、美しい恋人ブランシュフルールを守ったあの若い騎士は、彼女の傍に臥して愉しい時を過ごしていた。そして、恋人も領地もそっくり、自分のものになっていたであろう、もし彼の心が他所になく、みちたりていたならば（p. 197）

自らの意志で行動したことで、ペルスヴァルは天幕の乙女のときには得られなかった女性との楽しい時間を得る。さらには、彼女自身と彼女の領地も得ることができたのである。当時の騎士にとって、領地をもつ恋人を得ることは、現世で得られる最高の名誉であった。ある意味、ペルスヴァルの騎士としての成功はここで最高潮に達するのである。しかし、ペルスヴァルは母が心配で再び旅に出てしまう。

5　聖杯と母の役割

5.1　聖杯と主体性の限界

聖杯の由来についてはフラピエをはじめとして多くの先達の優れた説が存在するのでここでは論じない。本論においては聖杯がもつ役割を考察する。

アーサー王の城で醜い乙女に漁夫王の城での件を咎められたペルスヴァルは、聖杯探索の旅にでる。ゴーヴァンの挿話のあと、五年後のペルスヴァルが描かれている。以下の引用が五年経った彼の様子である。

> ペルスヴァルは、物語がわれらに語るところによれば、じつに、記憶を失ってしまい、神のことを全く思い出すことなく、四月と五月が五度び過ぎて、まるまる五年間というもの、僧院に足を踏み入れることなく、神をも十字架をも拝むことなく過ぎた。こうして五年間のあい

だ、騎士としての道を求めることは、ないがしろにしたわけではない。奇怪な冒険の数々が、恐るべき危難、きびしい試練を、求めつづけ、遭遇し、みごとに武勇を発揮した。価値ある六十人の騎士を、アーサー王の宮廷へ、五年の間に送ったのだ。こうして五年の間、神のことはつゆ思い出さなかった（p. 258）

五年間の流浪で、ペルスヴァルは騎士として立派な成長を遂げ、数々の武功を立てている。だが重要な聖杯には少しも近づけていない。醜い乙女に責められた彼は誓いを立てて旅に出たにもかかわらず、聖杯にはたどり着けないのだ。そのうえそれまでは丁寧に描かれていた決闘は、ここでは大幅に省略されている。明らかにクレティアンは、ペルスヴァルの成長の方向性が変わったことを示している。もはや世俗的騎士としての資質は重要ではなく、ここからペルスヴァルは次の次元、つまり宗教的な次元へと向かう。聖杯とはペルスヴァルを宗教的次元へと誘うための装置なのだ。そして、その次元では主体性はもう成長を促せないのである。

5.2　母と恩寵

宗教的次元での成長は、どのようにして遂げることができるのだろうか。この次元では主体性も宮廷風恋愛の理念も通用しないことは、クレティアンが必要以上に描いている。聖金曜日に武装して歩いていたペルスヴァルは、騎士と貴婦人の集団と遭遇して、彼らから武装していることを責められる。

親しき友よ、そなたはイエス・キリストを信じないのか、新しい掟を書き記して、キリスト教徒にそれを授けられたお方を？　まったく、道理をはずれた、よからぬことですぞ、イエス・キリストが亡くなられたこの日に、武具を携行するとは、大いなるあやまちだ…あのお方を信ずるものはみな、今日、罪を贖わなければなりません。今日この日、

> およそ神を信じる者ならば、武器を携えて、野であれ道であれ、歩くべきではないのです（pp. 258-259）

そして彼らは、自分たちは罪の告白をしてきたのだと語る。彼らの叱責は、従姉や醜い乙女のものとは異なり、ペルスヴァルに対して宗教的な道を示す。彼らの言葉を受けてペルスヴァルは、涙を流し、罪の告白をするために、隠者がいる礼拝堂へと向かう。ペルスヴァルは聖杯の城での件を、自らの罪として告白するが、隠者がペルスヴァルの真の罪を語る。それはペルスヴァルが荒れ森に残してきた母の苦しみである。

> 兄弟よ、まことにおまえに災いをもたらしたのは、おまえが全く知らずにいるひとつの罪――お前が母に別れたとき、おまえの母親が味わった苦しみのことじゃ。門の前の橋のたもとに、彼女は気を失って地に倒れ、その苦しみゆえに身まかったのじゃ。この、おまえの罪ゆえに、おまえは槍についてもグラアルについても、何ひとつ質問しないという破目に陥ったのだし、さらに諸々の、よからぬことも起こったのじゃ（p. 261）

ペルスヴァルの失敗や苦難はすべて、彼が旅立ったために、母が味わった苦しみに起因するのだという。ここでペルスヴァルは自身の本当の罪を自覚するのだが、実際には従姉によって、ペルスヴァルの苦難は母を苦しめたことが原因であるとすでに語られているのである。

> せっかく、あの傷に苦しんでいる気高い王を、すっかり癒してさしあげられたのに。あの王さまは、身体もすっかり癒られ、領土をしっかり治められになられたのに、そしてあなたにいいことがたくさん起こったのに！　ところが、いいこと？　たくさんのわざわいが、おかげであなたにも他の人々にも襲ってくるのよ。こんなことになったのも、いいですか、あなたがお母さまに対して犯した罪のせいなのよ。だっ

て、お母さまはあなたを失った悲しみからお亡くなりになったんですもの（p. 209）

ペルスヴァルの反応は、ただ母の死に戸惑うばかりであり、自身が犯した真の罪を認識してはいない。だからこそ彼は隠者のもとで、自身の罪は聖杯の城で沈黙を貫いたことであると告白したのである。

ポフィレはペルスヴァルの母に対する罪について、クレティアンがペルスヴァルに道徳的挫折を与えたいがために欲した口実であり、母その人自体の役割は、ペルスヴァルが出立した時点で終わっているのだと述べる。

ペルスヴァルは母の許しをえて出立するところではなかったのか？　…さらにまた、ペルスヴァルがグラアルの城と遭遇するのは、まさしく母親のもとに戻る道中なのである。…結局のところ、息子の出立以後、母親の役割は終わって、その影響力も期限切れになったのだ。ペルスヴァルの騎士再教育の場面で、クレチアンはそのことを強調していた。そうなれば、物語の続きに関して、善良な奥方が死のうと、森に隠れ住み続けようと、それは極めてどうでもよい、重大でないことになってしまった。明らかにこの芳しくない話は呼び込みであり、クレチアンは、挫折の道徳的理由づけのために、ペルスヴァルを非難する口実が欲しかったのである（ポフィレ、pp. 222-223）

しかし、母の死がペルスヴァルの挫折のために作られた出来事で、母の役割は物語の序盤ですでに終わっているのだろうか。むしろ、聖杯との遭遇直後に従姉が現れて母の死に言及していることは、クレティアンが母の死を周到に物語に忍び込ませ、ペルスヴァルに重大な束縛を与えているように思える。それにポフィレが言及しているように、母との再会はペルスヴァルの願いであって、そのために恋人のもとを去っているのである。母の役割は決して物語において小さくはなく、聖杯の城での

失敗も結局母に起因している。では母の死の苦しみと聖杯の城での失敗はどのようなつながりがあるのだろうか。

母の死についてペルスヴァルは二つの反応を示している。一つ目は動揺で、今まさに会いに行こうとした母が死んでいたと聞かされたことに対する当然の反応といえる。しかし、ペルスヴァルはすぐにもう一つの反応を見せる。彼は薄情と思えるほど早く母の死を受け入れる。

> 母さんが葬られてしまった以上、これからわたしは何を求めて行けばいいんだ？　だって、これまでこうしてやってきたのも、ただ母に会いたいと――それ以外に目あてはなかったのだから。他の道を行かねばならぬ。で、もしあなたがわたしと一緒に来る気があったら、嬉しいんだけれど。だって、はっきり言うけど、そこに死んで横たわっているその騎士は、もうあなたに何も求めないんだから。死んだ人は死んだ人のところ、生きている者は生きている者同士だよ。あなたとわたしと、一緒に行こう、こんなところに一人きりで死人の番をするなんて、大変な気ちがいみたいだよ（p. 210）

恋人の亡骸を抱える従姉に対して、ペルスヴァルは共に行こうと言い、彼自身も母の死をあっさりと受け止めている。ここでペルスヴァルは母の記憶を失ってしまうのである。それゆえ、従姉から母に与えた苦しみの罪を指摘されたのにもかかわらず、ペルスヴァルは隠者のもとで行った罪の告解として聖杯の城での出来事を挙げている。そして隠者に言われ、母に対する罪を認識する。ペルスヴァルが告解を行う章の冒頭と、母の忠告のなかで、「教会（église）」と「僧院（mostier）」が使い分けられていることに関して、天澤はこの使い分けは正確にふまえた符合であるという[5)]。そしてペルスヴァルは母の言葉を喪失したと述べる。

5）天沢、pp. 189–191.

（ペルスヴァルが聖杯探索にでてからの）≪五年間≫に彼が失っていたものは、母なるものの言葉であり、母の喪失はさらに言葉の喪失によって二重化されていたことになる（天沢、p. 191、括弧内筆者）

聖杯にたどり着くには信仰と神から賜う恩寵が必要なことは明白だ。最初の旅立ちのとき、ペルスヴァルはキリスト教についてまったくの無知で、母によって恩寵を保証されている。しかし母の死を顧みない彼の態度は、彼の記憶から母を消してしまい。さらにそれは恩寵の喪失になる。ペルスヴァルは隠者に対して聖杯の件で告解をするが、それでは罪の赦しにはならない。真の罪は母に対するものなのだから当然である。

隠者はもう一つ重要なことを語る。それは母が息子の無事を神に祈ったからこそ、ペルスヴァルはこれまで冒険をすることができたということである。

おまえはこれまで生き延びることもできなかったであろうぞ、もし母親がおまえのご加護を、神さまにお祈りしていなかったら――肝に銘じるがよい。しかし母の祈りには大いなる徳があるゆえに、神は彼女に免じておまえを見守り給い、死から、虜囚から、お護りくださったのじゃ（p. 261）

ペルスヴァルは教会も知らないほど、宗教的に無知である。それに騎士を神だと間違えて、これまでずっと祈りすら知らなかったのだから、はたして神の恩寵にあずかることができているかどうかは疑問だ。それゆえペルスヴァルの恩寵は、母の息子を思う祈りによるもの、いわば母からの借り物ともいえる。ペルスヴァルは神の愛ではなく、母の愛によって護られていた。そこでクレティアンは、ペルスヴァルが自分自身の恩寵を受ける、試練と挫折の経験として聖杯を設定した。ペルスヴァルが聖杯を手に入れるためには、彼自身が神の恩寵を預からなければならない。聖杯の失敗を契機に、ペルスヴァルは恩寵を得て真のキリスト者

となる道を歩むわけだ。

隠者はペルスヴァルにキリスト者としての心得を語る。母とゴルヌマンが言った、教会で祈りを欠かさぬように、というものと比べると、かなり具体的で実践的な信仰の教えが授けられる。

> もし自分の魂を憐れむ気持が起こったのなら、真の悔悟の念を持ちなさい。そして、罪を贖うために、他の何処よりも、僧院へ毎朝行くことだ、そうすればきっとよいことがあろう。…そしてもし弥撒が始まっていたら、いっそうよいことがあろう、その場にとどまることだ、司祭がすべてを語り、唱い終えるまで。…神を愛し、神を信じ、神を崇めよ。立派な人物や立派な婦人には敬意を払い、司祭様の前では起立しなさい。…もしおまえの助けを求める乙女あれば、助けてあげるがよい、それはおまえのためにもなるのだ、相手が寡婦でも、あるいは身寄りのない女性でも。…贖罪のためにおまえにしてほしいことは以上のとおりだ。もしおまえが、かつては恵まれておったような、恩寵に再び浴したいと願うならば（p. 262）

ここまでくると騎士というより、信仰者としての心持ちである。クレティアンは世俗的な騎士の精神よりも、宗教的な精神に重きをおいている。そしてペルスヴァルは二日間隠者と共に過ごし、彼と同じ食事をとり、聖体拝領を受けるわけである。聖体拝領はパンとワインをキリストの血肉として自らに取り入れるサクラメントの一つである。十二世紀、サン・ヴィクトールのユーゴは「サクラメントは恩寵を含む」と述べ、ピーター・ロンバードも「サクラメントは恩寵のもととなる」と主張しており、聖体拝領が恩寵を受けるために儀式と考えられていたことがわかる。

ポフィレは「作者（クレティアン）は…彼（ペルスヴァル）をキリスト教徒の生活に完全に復帰せしめる行為、復活祭の聖体拝領に預からせ

ることを望むのである（括弧内筆者）」と述べている[6)]。生まれたときに洗礼を施されたであろうペルスヴァルは、神の恩寵を受けていた。しかし、無知と信仰を知らなかったために彼は恩寵を失った。かわりに母の恩寵を自覚なしに借り受けていた。借り物の恩寵では聖杯へとたどり着くことができない。そこでペルスヴァルは罪の告白と聖体拝領により自分自身の恩寵を受けて、聖杯へとたどり着く資格をもつのである。

母の役割は、ペルスヴァルの出立時点で終わっているわけではない。聖体拝領までペルスヴァルが受けていた恩寵は母の祈りによるものだった。つまりペルスヴァルを護っていたのは神の愛ではなく母の愛なのである。そして聖体拝領によって、母の愛から神の愛がペルスヴァルを護ることになる。母の役割はここでようやく終わり、ペルスヴァルは神を愛し、神に愛されることで、聖杯を手に入れることができる宗教的な次元へと到達するのである。

6　まとめ

『聖杯の物語』は、ポフィレが主張したような、騎士の枠組みの中で教化されていく主人公を描いたものではなく、主体性を通して世俗的に、母の愛と恩寵を通して宗教的に成長する個人を描いたものだった。母という存在もペルスヴァルの成長に大きな影響を最後まで与え続けたのだ。それまでの模範たる騎士の主人公たちよりも、もっと普遍的に高次元なヒーローとなるべき人物がペルスヴァルであった。もし『聖杯の物語』が完結していれば、どのような終わりを迎えたであろうか。おそらく、騎士という世俗身分を越えた存在となったペルスヴァルが、聖杯を手にしていたのではないだろうか。

（本学卒業生）

6）p. 251.

参考文献

天澤退二郎　『幻想の解読』　筑摩書房　1981年
天沢退二郎訳　『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』(フランス中世文学集2)　白水社　1991年
ウィンター，J・M・ファン　佐藤牧夫・平尾浩三訳　『騎士：その理想と現実』　東京書籍　1982年
カエサル　國原吉之助訳　『ガリア戦記』　講談社　1994年
加藤恭子　「Chrétien de Troyes作Le Roman de Perceval ou le Conte du Graalにおける諸問題」『上智大学仏語・仏文学論集』22　pp. 47-61　1988年
加藤恭子　「クレチアン・ド・トロワと同時代の作家たちにおける「愛」」『上智大学仏語・仏文学論集』25　pp. 19-37　1991年
グリーン，ミランダ・J　井村君江監訳　大出建訳　『図説ドルイド』　東京書籍　2006年
田中仁彦　『ケルト神話と中世騎士物語 ── 「他界」への旅と冒険』　中央公論新社　1999年
中野節子訳　徳岡久生協力　『マビノギオン ── 中世ウェールズ幻想物語集 ──』　JULIA出版局　2000年
中野節子　「ウェールズの聖杯伝説：「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」から」『大妻女子大学紀要』文系37　pp. 15-27　2005年
野口洋二　『中世ヨーロッパの異教・迷信・魔術』　早稲田大学出版部　2016年
バデル，ピエール＝イヴ　原野昇訳　『フランス中世の文学生活』　白水社　1993年
フラピエ，ジャン　松村剛訳　『アーサー王とクレチヤン・ド・トロワ』　朝日出版局　1988年
ブレキリアン，ヤン　田中仁彦・山邑久仁子訳『ケルト神話の世界』　中央公論社　1998年
フロリ，ジャン　新倉俊一訳　『中世フランスの騎士』　白水社　1998年
ペインター，シドニー　氏家哲夫訳　『フランス騎士道 ── 中世フランスにおける騎士道理念の慣行 ──』　松柏社　2001年
ポフィレ，アルベール　新倉俊一訳　『中世の遺贈 ── フランス中世文学への招待 ──』　筑摩書房　1994年
武藤一雄・平石善司編　『キリスト教を学ぶ人のために』　世界思想社　1988年
横山安由美　「聖杯と聖体祭儀 ── ロベール・ド・ボロン再考 ──」『フェリス女学院大学文学部紀要』31　pp. 45-98　1996年
リトルトン，C・スコット、マルカー，A・リンダ　辺見葉子・吉田瑞穂訳　『アーサ

ー王伝説の起源――スキタイからキャメロットへ――』　青土社　1998年
渡邉浩司　『クレチアン・ド・トロワ研究序説』　中央大学出版部　2002年
Hastings, James. *Encyclopedia of Religion and Ethics,* Vol. 5, Edinburgh, 1908,［pp. 540-589］